2024年第69回日本母親大会 in 和歌山

母親大会７０年の歴史の中で、和歌山県初開催です。全国の人たちとの交流の中で、和歌山の諸運動を語り知らせるとともに、全国各地の取組みを大いに学びましょう。

とき／ところ　９月２８日（土）１３：００～１６：３０　全体会
於；和歌山県民文化会館大ホール　小ホール（サブ会場）
９月２９日（日）　９：３０～１２：３０（予定）　分科会
於；和歌山城ホール　プラザホープ　ビッグ愛　(2.24 現在)

母親大会誕生となった原点に立ち返り、70年の歩みと私たちを取り巻く“今”を見つめながら、未来につなぐ「平和運動の形」を多様な視点から語り合いましょう

１９５４年３月１日未明、太平洋上のマーシャル諸島ビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験によって、近くの島々の国やマグロ漁をしていた日本の多くの漁船が「死の灰」を浴びました。事前には、何も知らされてはいませんでした。漁師たちの証言に共通していたのは、「空がオレンジ色に染まり、大きな爆発音がした」という言葉でした。その時、静岡県焼津港から出港していた第五福竜丸の乗組員２３名も被曝し、その一人、久保山愛吉さんが半年後、激しい苦しみの中で亡くなったのです。

広島、長崎に次ぐ三度目の原水爆被災を知った日本の人々は、大きなショックと怒りを感じ、すぐに「原水爆禁止」の声を上げ署名活動を呼びかけました。その呼びかけに、女性たちはいち早く呼応し、東京都杉並区の主婦たちがエプロン掛けで始めた署名活動は、瞬く間に全国へ広がっていきました。「男女平等」を保障した日本国憲法に背中を押され、「市井でくらす一般」の女性たち、とりわけ、家庭の母親たちが多く参加した初めてともいえる「全国的な社会運動」でした。家族が戦死しても、台所の片隅で黙って耐えるしかなかった女性たち、そして、二度と夫や子どもを戦争で失いたくないと思う母親たちの必死の思いから生まれた行動だったのです。総署名数は、3000 万筆に達したと記録されています。

翌年６月に第一回日本母親大会、７月にスイスのローザンヌで世界母親大会、８月には、原水爆禁止世界大会が開催されました。「母親大会」と「原水爆禁止運動」は、「双子の平和運動」と呼ばれ、長く協力・連携しながら「核のない世界」への運動を推進してきたのです。

『ビキニ被災』から70年の今年、和歌山で日本母親大会が初開催されます

ビキニ被災７０年の今年、和歌山で日本母親大会が開催されます。
２月２２日に開催された第１回日本母親大会実行委員会で、全体会講演の講師は、

安田和也氏　第五福竜丸展示館（東京都江東区夢の島 2-1-1）**館長**

に決定しました。とてもタイムリーな、そして「in 和歌山」にふさわしい講師です。

第五福竜丸がたどった歴史や久保山愛吉さん以外の乗組員のその後の人生、アメリカと日

本政府が蓋をしようとした事実を市民たちが地道な調査で明らかにしてきた「ビキニ被災」の実相を、その後の原水爆反対運動の歩みと共にお話しいただけるのではと思います。

ここでは、第五福竜丸が和歌山県と深い関係があることを少しお伝えできればと思います。
第五福竜丸は、和歌山県東牟婁郡旧古座町(現串本町)で建造されたカツオ漁船でした。数年後に静岡県の船主に譲渡されマグロ漁船として改造され、船名「第五福竜丸」となりました。ビキニ被災の後は、また持ち主が変わり、やがて廃船となり、東京都江東区の夢の島(ごみ集積場)に捨てられます。その時、まだ使えたエンジンだけは、また次の船主に引き渡され、しばらく使用された後、熊野灘沖で遭難し海底深く沈んでしまいました。(1968.7)
やがて、そうした事実を知った海南市在住の市民が広く呼びかけ、多くの市民、労働組合やわかやま市民生協が協力し合って、引き上げを実現させたのです。(1998.8)　そのエンジンは、今、第五福竜丸展示館の庭に展示され、世界に向けて静かに核廃絶を訴え続けています。第五福竜丸と和歌山には、このような奇(く)しき縁(えにし)があったのです。

「核戦争の危機から子どもを守ろう」と歩み続けて

「母親大会」の誕生は、全国中に広がった母親たちを中心とした「原水爆禁止」の署名運動を世界に知らせたいと、婦人団体連合会の平塚らいてうが、国際民主婦人連盟に「原水爆禁止を願う日本女性の訴え」を送ったのがきっかけでした。国際民婦連は「恒久平和と子どもの幸せ・婦人の開放」の３つを運動の柱としており、女性の権利とともに、ナチスドイツや日本軍国主義によって、多くの子どもたちの命が奪われた事実をふまえて、戦争から『子どもを守る』ことは女性の要求」として、ここに、「世界母親大会」の名称で開催が決定したのでした。大会で読まれた「生命を生みだす母親は　生命を育て　生命をまもることをのぞみます」の詩を受け止め、母親大会のスローガンとしてずっと大切にしてきています。
１９５５年６月、世界母親大会を１か月後に控え、第１回日本母親大会が開催されました。世界母親大会開催後は、その報告会として第２回日本母親大会、各地の県母親大会や地域母親大会が開催されました。世界母親大会は 1 回だけでしたが、日本中に根付いた母親大会は、いろんな要求の実現に広がり発展し続けました。今私達の身近にある要求別の組織や団体も、母親大会での話し合いがきっかけとなって実現したものも多いのではないでしょうか。

未来につなぐ「平和運動の形」を多様な視点から語り合いましょう

ロシアのウクライナ侵略、イスラエルのパレスチナ・ガザへの爆撃の終わりが見えない中、破壊され尽くした街並み、その下で失われ続ける生命に胸が詰まります。戦争責任も関与もない子どもや女性が犠牲者の大半だと言われています。国内でも、政治を私物化しながら平和憲法を踏みにじり軍拡に暴走する権力者たちに、これ以上好きにさせてはおけません。
「戦争・殺戮を即時止めよ！戦争準備を止めよ！国民のための政治をせよ！」と世論の声と行動の輪をもっともっと大きくしていく時です。女性たちが中心になって進めてきた「いのちを育て守る平和運動＝母親大会」の存在価値と責任は、今一層重く大きいと思います。
次の時代に合った母親大会の在り様も、行動しながら考え、語り合っていきましょう。